

共につくる。まるごと元気! 多治見

昭和15年8月、岐阜県で4番目の市として誕生した多治見市。その後、周辺町村の編入・合併により規模を拡大し、古くからの窯業に加えて、名古屋圏や東京圏とのアクセスの良さなどから、東濃地域における中心的存在へと発展してきた。市制80周年を迎えるにあたり、

古川雅典市長に期する思いなどを聞いた。

企業誘致を推し進めて
雇用創出と収増に

多治見市は陶磁器、美濃焼タイルの産地として発展を遂げてきた。古川市長の子ども時代の思い出も、そんな地場産業にまつわるものが多い。

「白く濁っていた土岐川の水や、周囲の山の木が切られ、はげ山

だつたことを、今でも鮮明に覚えています。経済的な繁栄が優先され、当時はだれも悪いことだと思つていませんでした。みなさんの努力で、川はきれいになり、山の緑も復活しましたが、振り返つてみれば、それがぼくにとって一番のまちの変化です。また、陶磁器や美濃焼タイル産業は、多治見だけの労働人口ではとても担えず、

『金の卵』と呼ばれていた九州方面からの若い労働者を、集団就職として多治見駅で大勢お迎えしたのも思い出深いですね」

多治見市議会議員に当選した昭和62年以降、市政に携わってきた中、転機といえるような事業について尋ねると、「まずは企業誘致です」と話す。

市の経済は陶磁器、美濃焼タイルなどの窯業が支えてきたため、新規企業の進出はほとんどなかった。しかし、少子高齢化が進むにつれ、教育や医療、福祉の支出は増大するばかり。市長に当選した平成19年に「企業誘致

「課」を設置し、税収の増加を図った。

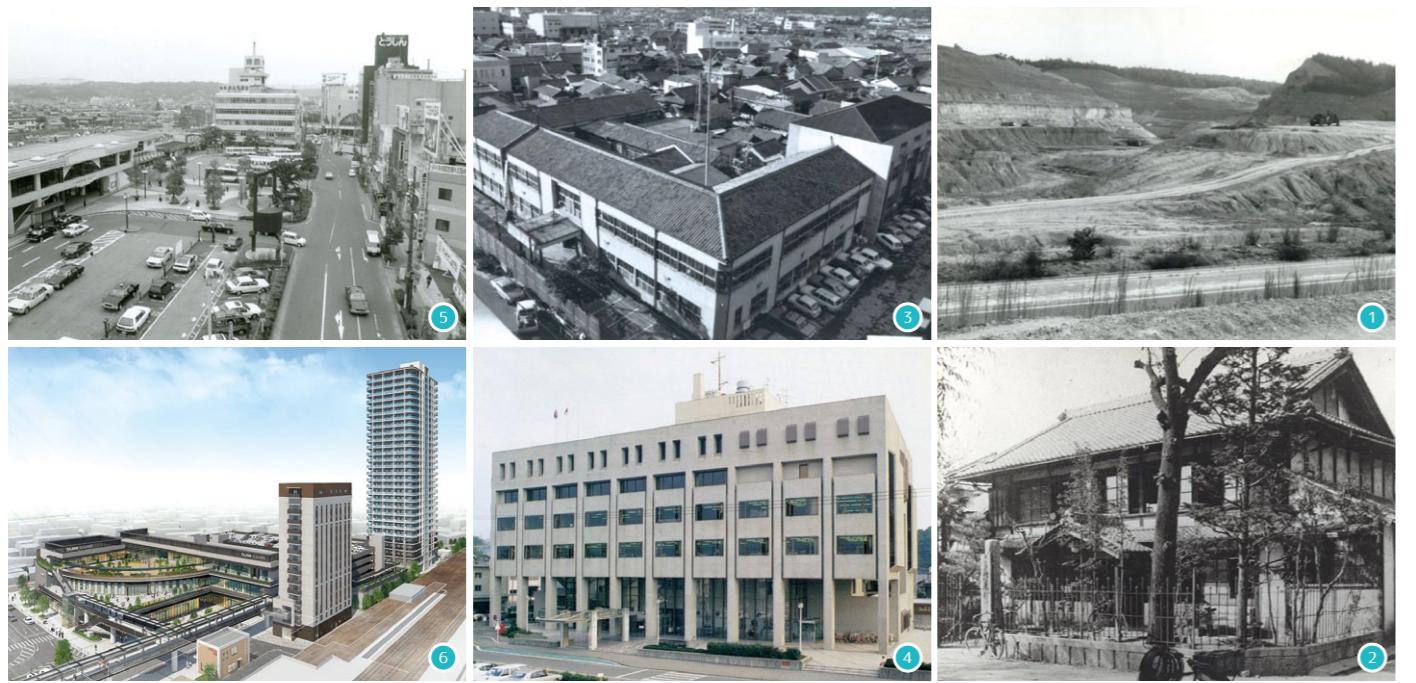
「市議会議員時代、いろいろと提案や提案をしましたが、財源がないとの理由でほとんど実現できませんでした。だったらお金が入るまちにしようと企業誘致に取り組んだのです。環境負荷の少ない粘土鉱山跡地を開発、分



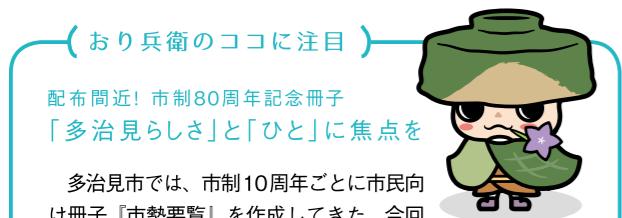
profile

多治見市長
古川雅典
(ふるかわ まさのり)

昭和27年6月26日、多治見市生まれ。岐阜県立多治見北高等学校、芝浦工業大学工学部卒業。多治見市議会議員(3期)、岐阜県議会議員(2期)を経て、平成19年4月多治見市長に当選。現在4期目



①企業誘致のために整備された粘土鉱山の跡地 ②明治22年に土岐郡多治見町が成立した。写真は昭和9年当時の多治見駅駅場 ③昭和25年完成の市庁舎。昭和45年には市役所南分庁舎が焼失した ④現在の市役所本庁舎は昭和49年に完成。総工費は9億7,243万円だった ⑤平成4年当時の多治見駅前の様子。この年、駅に自動改札機が設置された ⑥「ネットワーク型コンパクトシティ」の実現に向け、多治見駅周辺の開発が進められている。写真は駅南地区再開発のイメージ図



おり兵衛のココに注目
配布間近! 市制80周年記念冊子
「多治見らしさ」と「ひと」に焦点を

多治見市では、市制10周年ごとに市民向け冊子『市勢要覧』を作成してきた。今回はこれまでの内容、構成を踏襲しながらも、新しい視点として「多治見らしさ」を取り入れたという。

「多治見らしさ」とは、第7次総合計画の「20年30年先を見据えた長期ビジョン」に記された市の魅力や特徴のこと。写真などを多用し、市民とイメージが共有しやすいよう、工夫を凝らしている。

地域で活躍している「ひと」にもスポットを当てた。市制80周年記念シンボルマークを制作した笠原町出身のデザイナー谷口佐智子さんや、7人の観光大使を取り上げている。

そのほか、80年の歩みを振り返る年表、施設やイベントの紹介、市の多様なデータなどの紙面が続く。『市勢要覧』は「広報たじみ」8月号(8月1日発行)といっしょに全戸に配布される。「私たちが暮らす多治見の良さをぜひ再認識してほしい」と担当者は話す。



次代を担う
子どもたちの
表情にも注目して
ください

譲して、企業を呼び込みました。大手企業の誘致が叶い、若い人たちの働く場所もできました。そして増えた収入で、岐阜県下ナンバーワンの教育と医療環境の充実を目指しています」

100周年を見据えて
記念式典に新成人を

市の人口推移を見てみると、誕生当時の2万6千820人から右肩上がりに伸び、平成18年の笠原町との合併で、11万7千人を超えた。しかし、同20年からは減少に転じ、同26年には「消滅可能性都市」のひとつに数えられる。

「消滅可能性都市の返上を掲げて、第7次多治見市総合計画を策定しました。前期を終えて、一定

の成果を得ましたが、さらにもう一度元気にするため、市民の皆さん、とくに若い世代や女性の意見を聞き、後期計画を見直しました。キーワードは『ネットワーク型コンパクトシティ』で、目玉となるのが多治見駅周辺の再開発です。駅南地区の再開発は、2年後の完成を目指しており、その最終形と合わせて、市役所本庁舎を今の駅北庁舎の隣接地に建設したいと考えています」

「多治見の魅力を小さな頃から、根付かせていく。それも何気なく、ジワッと浸透していくように。即効性はないかもしれませんが、郷土愛の醸成、人財の育成に力を注いできました。未来の多治見を担う人財を増やすことも、市政運営において市長の大重要な役目です。8月の市制80周年の記念式典では、総合司会を高校生とし、新成人の代表を呼びます。彼らに『市制100周年は私たちに任せてください』とぜひ言ってほしいですね。最後にですが、市制80周年という大きな節目と大きなお祝いに、市長として迎えられることを本当に感謝します」